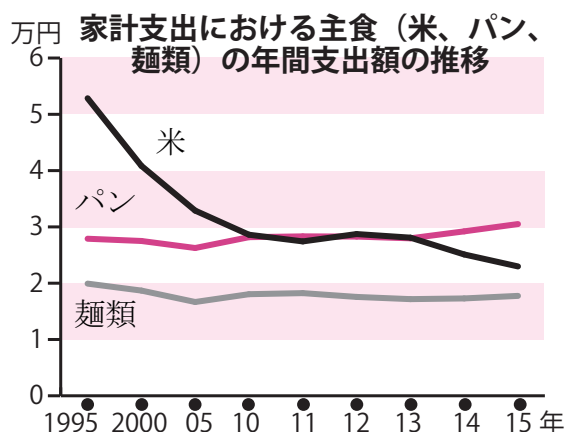


ビジネス フォーカス

大変化？日本の食の未来

一汁三菜を基本とする日本の食事スタイルは理想的な栄養バランスと言われる。日本人の長寿や肥満率の低さは医学界でも研究対象となり、ユネスコの無形文化遺産に登録された和食は世界的にも注目されている。

このように、世界に誇れる日本の「食」であるが、戦後の高度経済成長とそれに伴う生活スタイルの変化、都市化と核家族化、食の簡便化と洋風化、家族揃っての食事から個食へのシフトなど、さまざまな要因から大きく変貌しつつある。



家計調査年報（総務省）によると、1995年から2015年の「主食（コメ、パン、麺類）」の年間消費支出は、かつて主役であったコメは1995年の5万2852円が2015年には2万2981円に急減した一方、麺類は同1万9925円が同1万7747円に微減し、パンについては同2万7898円が同3万507円に増加した。家庭における主食の主役交代が近づきつつある。

同調査から、生鮮魚介、生鮮肉、生鮮野菜、生鮮果物の支出

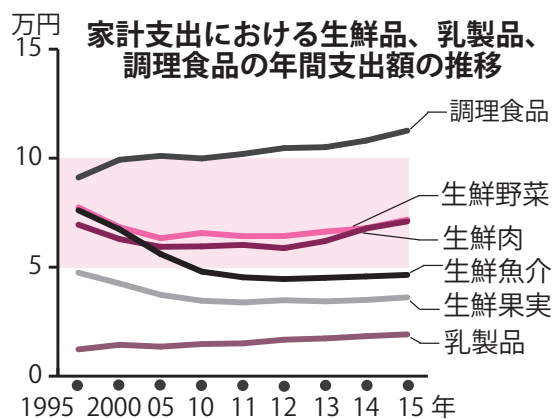
額を見ると、生鮮魚介は同7万6086円が同4万6454円まで落ち込み、それ以降も微減、微増を繰り返している。これとよく似た推移となったのが生鮮果物である。

一方、生鮮肉は同6万9471円が同7万1000円となり、多少のこぼれはあるものの長期増加傾向にある。これとよく似た推移となったのが生鮮野菜である。

なお、ヨーグルト、バター、チーズなどの乳製品は同1万2286円が同1万9163円に、家庭で料理せずに食べられる調理食品は同9万1133円が同11万2625円に増加している。

このように、家庭での調理が減り、加工食品の使用が増え、同時に食の洋風化が進んでいることが統計数値からも読み取れる。

日本では、今後も人口減少、高齢化、小家族化が同時進行し、これに伴い家庭の食料支出は減



少するとみられる。高齢者世帯や単身世帯の増加は、家庭内で生鮮食品を使って調理する機会が減少する一方、調理食品の使用は増加が予想される。

日本の家庭から包丁とまな板、そしてガスコンロが消え、電子レンジがあれば全ての食事が賄える時代が到来するのだろうか。近い将来、世界に誇れる日本の「食」が大きく変化するであろう。

（矢野経済研究所 フード・ライフサイエンスユニット

理事研究員 加藤 肇）